

「オノマトペ+つく」の形式を持つ日本語の複合動詞について

教養教育 杉浦 隆

抄録：「オノマトペ+つく」という形態を持った複合動詞の統語的及び意味的特徴の分析を行う。「つく」には非能格タイプと、非対格があり、それぞれ異なった LCS を持つことを示す。また、オノマトペ表現は「つく」に対する副詞的付加語として機能し、「つく」のタイプによって、状態変化の結果を表すものと、活動の様態を表すものがあることを示す。

索引語：オノマトペ、複合動詞、語彙概念構造、語形成

0. はじめに

日本語はオノマトペ（擬声語・擬音語・擬態語）が豊富な言語だとよく言われる。田守・スコウラップ（1999）によれば、日本語と英語でオノマトペに該当する表現を比較・検討したうえで、日本語には明らかにオノマトペという語彙層が確実に存在している、としている。

実際、(1)―(3)に挙げるようにオノマトペは日本語においては様々な形で使われる。

- (1) a. 犬はワンワン、猫はニャーとなく。
b. カキーン、とバットがボールをスタンドへ運んだ。
c. ドアを何度もコンコン、ノックしないでください。
- (2) a. あの子はなんとなくいつもそわそわしている。
b. 怒りでわなわなと震えた。
- (3) 「キヤー」という悲鳴が暗闇から聞こえた。

また、オノマトペを利用した複合語の例も下記のように多く見られる。(4)は名詞の一部にオノマトペが使われている例、(5)は動詞の一部に使われている例である。

- (4) a. ふんわりマシュマロ、どか雪、こそ泥
b. どんちゃん騒ぎ、きりきり舞い、ぼろ儲け、ぼい捨て、ばら売り
c. がら空き、びしょ濡れ、ごった煮
- (5) a. ふらつく、むかつく、いちゃつく、べとつく
b. きらめく、ゆらめく、よろめく、ざわめく

本稿では(5) a.に見られるような「オノマトペ+つく」の形式を持つ動詞を取り上げ、動詞全体の統語的、意味的特徴を明らかにする。

1. 「語」としての資格

本稿の考察対象である「オノマトペ+つく」の形式を持つ複合動詞には、以下のようなものがある。(田守・スコウラップ(1999)、姫野(1999))

- (6) ぐらつく、ふらつく、べたつく、いちゃつく、ごろつく、べとつく、ねばつく、ぱらつく、ちらつく、ぐずつく、うろつく、だぶつく、ぱくつく、ざわつく、むかつく、びくつく、ばさつく、まごつく、もたつく、がつつく、じとつく、ぎらつく、ばらつく、ぶらつく、

ひよろつく、ごたつく、ざらつく、ひりつく、がたつく

まずはじめに、これらの表現が句ではなく語であることを確認しておきたい。一般に句と語の違いは以下のような例から理解できる。

- (7) 句 語
- a. 花を見る／花見をする
 - b. 暗い部屋／暗室
 - c. 黒い板／黒板

上記(7)の例において、左側の表現は統語的な「句」であり、右側の表現(花見, 暗室, 黒板)が「語」にあたる。例えば「花を見る」と言った場合、対象となる花は何でもよいが、「花見をする」と言った場合の「花」は桜の花を指すのが普通である。同様に「暗い部屋」は単に照明がないなど、光量が少ない部屋を意味するが、「暗室」は写真の焼き付けをするための部屋であり、確かに使用中は部屋の光量はほとんどないが、一度用が済めば、明かりがともされる可能性がある。つまり、常に暗いわけではない。また「黒い板」といえば黒く塗られた板やもともと黒っぽい色をした板を指すが、「黒板」は通例、黒色ではなく、濃い緑色であり、しかも学校の教室で使われる、というように用途が限定される。このように句が表す意味は「透明」であるが、語の意味は慣習化されているという点で大きな違いが見られる。

影山・柴谷(1989)、影山(1993)ではある表現が統語的な句であるのか「語」であるかを判別するのに「形態的緊密性」をいくつかの方法で検証することを提案している。「語」はそれだけでまとまった単位を成すので1.形態的な不可分性、2.統語要素の排除、3.外部からの修飾禁止、4.語彙照応の制約といった諸特徴を持つ。(＊は文法的に容認できないことを表す)

1. 形態的な不可分性——語は統語的に分断できない。例えば「往復する」という語を「東京、大阪間を往復した」とは言えるが、「*東京へ往、大阪へ復した」とは言えない。
2. 統語要素の排除——「語」の内部には統語要素(句、格助詞、時制要素など)が入れない。「彼は高給取りだ」は可能だが「*彼は高給を取りだ」は不可である。
3. 外部からの修飾禁止——「語」一部分を外部から直接修飾することはできない。「[たいへん古い]時計」は可能だが「古時計」を「*[たいへん古]時計」(「たいへん」が「古」を修飾する)ということとはできない。
4. 語彙照応の制約——語の内部の要素を照応形で指すことはできない。(「照応の島」(anaphoric island (Postal 1969))「皿₁を洗っている最中に、それ₁を割ってしまった」は可能だが、「皿₁洗いの最中に、それ₁を割ってしまった」のように「それ」が「皿洗い」の中の「皿」をさす解釈はできない。

このような「語」に関わる制約を「オノマトベ+つく」について検証すると以下ようになる。

- (8) a. 形態的不可分性——手はかきつき、髪はばきついた。
*手はかき、髪はばきついた。
- b. 統語要素の排除——ねばつく/*ねばとつく
- c. 外部からの修飾禁止——[非常にひりひり]する
*[非常にひり]つく
- d. 語彙照応の制約——ドアはがたがたし、窓もそうなった²¹。
*ドアはがたつき、窓もそうなりついた。

以上の観察から「オノマトベ+つく」は「語」としての資格を有することがわかる。

なお、「オノマトベ+する」は(8) d. および下記の(9)に見るように、照応表現が可能であり、統語的に分断できることから、「語」ではなく「句」になることがわかる(影山 1993: 261)。

- (9) 頭はふらふら、口の中はねばねばしている。

3. 「オノマトペ+つく」の統語的特徴

(6)の動詞は「オノマトペ+つく」という形態的な点では共通するが、その統語的な働きまで同じというわけではない。一般に、動詞には自動詞と他動詞の区別がされることが多いが、実際には自動詞を二種類に分けて考えることが必要である (Perlmutter (1978), Burzio (1986), Levin and Rappaport Hovav (1995))。非能格動詞は意味役割の上で動作主 (Agent) や経験者 (Experiencer) を主語にとる自動詞で、意図的、意志的活動や人間の生理的な活動を表す動詞がこれに該当する。非対格動詞は対象 (Theme) を主語にとる自動詞で、位置変化や状態変化を表す動詞である。一般には自然に変化を受ける事象を表す動詞が当てはまる。3種の動詞の項構造の違いは概略(10)のように表される。

(10)		外項	内項
	a.	他動詞	(x <y>)
	b.	非能格動詞	(x <>)
	c.	非対格動詞	(<y>)

他動詞と非能格動詞は外項(x)を有するという点で共通し、非対格動詞の主語は内項(y) (多くの場合、変化を被る「対象」(Theme))に該当する。外項は多くの場合、動作主 (Agent) で具現するので、これらの違いは、主語が動作主であるかないかの違いである、といってよい。従って、これらの分類の大きな決め手になるのは動詞の表す事象に「意図性」があるかどうかということである。「意図性」が認められればそれは、すなわち動作主が存在することになる。主語として動作主が取れば、その動詞は他動詞か非能格動詞である、ということになる。他動詞か非能格動詞かは目的語の有無で容易に判断が付けられる。一方、動作主が取れなければ、非対格動詞であることがわかる。

動作主をとることが可能かどうか調べるには、動詞に副詞「わざと」がつけられるかどうかのテストが有効である。「わざと」がつけられるなら、その動詞は「意図性」を表すことになり、「動作主」を含意することがわかる。

- (11) a. 友人がわざと 大声でしゃべる / ゆっくり歩く
 b. 友人がわざと コップを割る
 c. *わざと 雨が降る / 船が沈む

(11)の例では、a.の「しゃべる、歩く」が非能格動詞、b.の「割る」が他動詞、c.の「降る、沈む」が非対格動詞に該当することになる。

そこで、(6)の複合動詞に同様のテストを施すと以下のようになる。(*は「わざと」がつけられない事象を表す。

- (12) わざと…
 *ぐらつく、ふらつく、*べたつく、いちゃつく、ごろつく、*べとつく、*ねばつく、
 *ばらつく、*ちらつく、*ぐずつく、うろつく、*だぶつく、ばくつく、ざわつく、
 *むかつく、*びくつく、*ばさつく、*まごつく、*もたつく、がっつく、*じとつく、
 *ぎらつく、*ばらつく、ぶらつく、*ひよろつく、*ごたつく、*ぎらつく、*ひりつく、
 *がたつく

整理すると以下のようになる。

- (13) 非対格動詞
 ぐらつく、べたつく、べとつく、ねばつく、ばらつく、ちらつく、ぐずつく、だぶつく、
 むかつく、びくつく、ばさつく、まごつく、もたつく、じとつく、ぎらつく、ばらつく、
 ひよろつく、ごたつく、ぎらつく、ひりつく、がたつく
- (14) 非能格動詞

ふらつく、いちゃつく、ごろつく、うろつく、ざわつく、ぶらつく

(15) 他動詞

ばくつく、がつつく

このように、同じ「オノマトペ+つく」でも、統語的な振る舞いについては差があることが明らかになった。

4. 後項要素「つく」の意味

後項の「つく」は、もともと「付く、着く、就く」などの動詞が基本になっていると考えられる。「取りつく、寝つく、こびりつく、こげつく」などの「つく」はこれらの意味を担っていると考えて良いであろう。

影山 (1993) では、「追い付く、飛び付く、染み付く」などのような「付く」が「接触、付着」などの意味を持つ複合動詞を例に挙げている。しかし、現在我々が考察している「オノマトペ+つく」の形式では、このような意味合いで用いられているとは言いにくい。下の例を見てみよう。

(16) a. 足下がふらつく。

b. 油でテーブルがべたつく。

これらが非対格動詞であることは先に見たとおりである。「足下がふらつく」では「足下がふらふらした状態になる」という意味であり、「テーブルがべたつく」は「テーブルが油で汚れた状態になる」ということである。なるほど、後者の例の場合、「べたべた」というオノマトペが基本になっていることを考えると「付着」の意味にとるのは一見可能なように思える。それでは、次の例ではどうであろうか。

(17) 空気が乾いて髪がばさつく。

上記の例では、「髪が乾燥した状態になる」ことを表している。「ばさばさ」は物体が乾燥し、水分が少なくなった状態を描写する。物理的に考えても水分が少なくなった状態では、物は付着しにくくなるであろう。従ってこの「つく」が「接触・付着」の意味を持つとは考えられない。むしろ、このような非対格動詞の「つく」は「オノマトペが表す状態に変化する」という意味を表していると考えられる。

さらに、次の例はどうであろうか。

(18) a. ならず者が町をうろつく／ぶらつく。

b. 電車の中でカップルがいちゃつく。

これらは非能格動詞であり、意図的・意志的な活動を表す（これは他動詞の場合も同様である。）ので、先ほどの「状態移行」という意味合いは出てこない。「うろつく」は「『うろろう』と表現される動作をする」ということであり、「『いちゃいちゃ』で表される行為をする」とことである。これらを考慮すると、非能格動詞（または他動詞）を形成する「つく」は「動作・活動」を意味すると言える。以上の事柄を考え合わせると、「オノマトペ+つく」において、「つく」には2種類の意味があると考えなければならない。

影山 (1993) では、「動詞+付く」の複合動詞において、「他動性調和の原則」に基づいて、非能格の「付く」と非対格の「付く」を区別する事を提案している (p. 124)。他動性調和の原則とは、「動詞+動詞」の複合動詞において、前項が意図的な意味を持つ動詞には非能格の後項が組み合わされ、前項が非意図的な意味を持つ場合は、非対格の後項が組み合わされる、というものである。以下に例を挙げる。(影山 (1993) の例を整理したもの)

(19) a. 他動詞+他動詞——買い取る、打ち落とす、追い払う、食い付く

b. 非能格+非能格——言い寄る、飛び降りる、泣き付く

c. 非対格+非対格——滑り落ちる、立ち並ぶ、絡み付く

d. 他動詞+非能格——待ち構える

- e. 非能格+他動詞——泣きはらす, ほほえみ返す
- f. 他動詞+非対格——*洗い落ちる, *切り落ちる
- g. 非能格+非対格——*泣きはれる, *走りころぶ
- h. 非対格+他動詞——*売れ飛ばす, 揺れ起こす
- i. 非対格+非能格——*ころび降りる, *崩れ降りる

このように、基本的には非対格動詞は他動詞や非能格動詞とは異なる振る舞いをする事がわかる。ところが、上記 a, b, c のそれぞれ最後の例に見られるように「付く」はいずれのタイプの前項とも複合動詞を形成できることから2種類の「付く」を想定する必要があると結論づけている。

我々の分析も「つく」に非対格タイプと非能格タイプを認める点で影山 (1993) の分析と同じであるが、ここでの「つく」は非対格タイプと非能格タイプの2つに分けられ、非対格タイプが「状態変化」を表し、非能格タイプが「活動」を表すと言える。

- (20) 「オノマトペ+つく」における「つく」の意味
- a. 「オノマトペ+つく」=非対格動詞の場合——「状態変化」
 - b. 「オノマトペ+つく」=非能格動詞・他動詞の場合——「活動」

5. 「オノマトペ+つく」複合動詞の形成

影山 (1993) では、「動詞1+動詞2」の複合動詞は、それぞれの動詞の項構造を合成させることで形成されるとしている。しかし、「オノマトペ+つく」においては、後項要素の「つく」は動詞要素であるので、項構造を持つのは明らかであるが、前項のオノマトペ部分は副詞であるので、項構造は認めにくい。従って、この形の複合語を項構造で形成すると考えるのは妥当ではない。

前項のオノマトペの働きはどのように考えればよいだろうか。複合語の前項にあたるオノマトペはもともと様態副詞である。さらに、下に見るようにこれらの様態副詞にはそれらが典型的に修飾する動詞が存在することが伺える。また、それ以外の動詞では想定された修飾関係が結べないことがわかる。

- (21) a. ぐらぐら → 物事が安定しない様子を表す
b. ぐらぐら する, 揺れる, *なぐる
- (22) a. ふらふら → 物の動きが安定しない様子を表す
b. ふらふら する, 立つ, 歩く, 走る, *飲む
- (23) a. ぶらぶら → 目的がない様子を表す
b. ぶらぶら する, 歩く, *投げる
- (24) a. べたべた → 物が粘着する様子を表す
b. べたべた する, 貼る, *引く
- (25) a. いちゃいちゃ → 2人(男女)が共にいる様子を表す
b. いちゃいちゃ する, 話す, *食べる

上記の観察から言えることは、これらのオノマトペは意味的に特定の動詞との関わりが強い、ということである。そして、これらのオノマトペが非反復形となり「つく」と結びつくと、下記のように動詞の選択の範囲はさらに狭くなる。

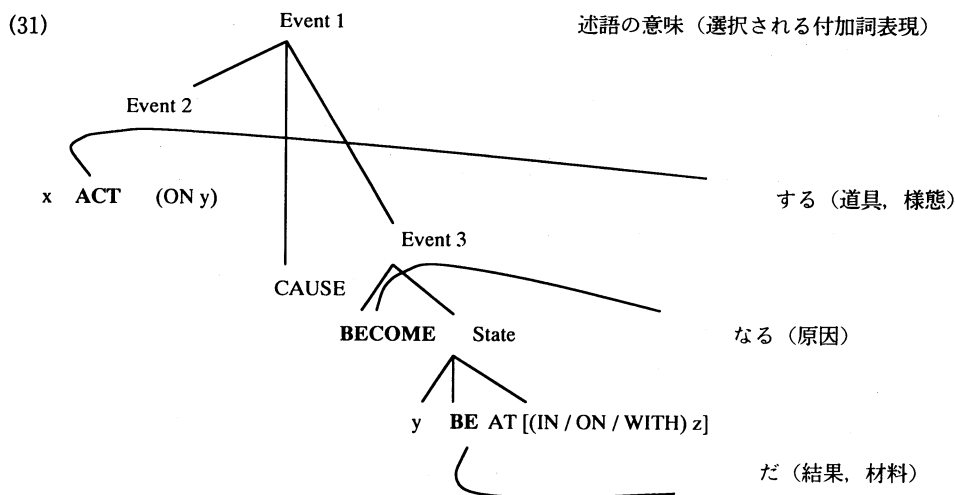
- (26) ぐらつく → ぐらぐら する, *揺れる
- (27) ふらつく → ふらふら する, *歩く, *走る
- (28) ぶらつく → ぶらぶら する, 歩く, *投げる
- (29) べたつく → べたべた する, *貼る, *引く
- (30) いちゃつく → いちゃいちゃ する, *話す

例えば、「ぐらぐら」自体が結びつく可能性のある動詞は「する」、「揺れる」などが考えられるが、

「ぐらつく」の意味は何か「ぐらぐらした状態になる」ということであるので、その意味を表す動詞は「する」以外にはないことがわかる。

これらの例では、オノマトペの種類によって、同じ「する」という動詞でも解釈が異なることがわかる。「ぐらつく、ふらつく、べたつく」では「つく」が「状態変化」を表すが、「ぶらつく、いちゃつく」では「活動」を表す。

伊藤・杉岡 (2002) では「付加詞+動詞」の複合語における、付加詞の種類と動詞が表す動作性との関係について、「付加詞はその表す意味に基づいて、異なる基本述語を含む事象によって選択されていると考えられる」として、全てのタイプの基本述語を含む達成動詞の LCS に基づいて、以下のように図示している (伊藤・杉岡 2002: 117)。



(31)の図では、Event 2 (活動) を表す動詞 (ACT) ではその動作をするための道具や動詞の様態を修飾する付加詞が選択され、複合語を形成する (水洗い、がぶ飲みなど)。Event 3 (状態変化) を表す動詞は BECOME の下に結果状態を表す State が埋め込まれているので、付加詞の選択については、二通りの可能性がある。一つは上位事象である BECOME の原因となる付加詞が選択される (日焼け、仕事疲れ、など)。もう一つは下位事象の結果状態 (BE) を表す付加詞と結びつく場合である (黒こげ、びしょ濡れ、など)

この考えを援用すると、「オノマトペ+つく」においては、非能格型の場合は ACT を修飾する様態副詞と複合することになり、非能格型の場合は結果状態を表す付加語と結びつくことになる。

「つく」は非対格型は「状態変化」、非能格型は「活動」を表すことはこれまでに見てきたとおりであるので、それぞれの LCS は下記のように表示できる^{註2}。

(32) 「つく」の LCS

- a. 非対格型 [Event BECOME[State[y]BE AT[z]]]
- b. 非能格型 [Event[x]ACT(ON[y])]

しかし、このままではオノマトペの意味要素を表示できないので、LCS 内では下記のように、任意の要素として、非対格型ではオノマトペが結果状態を表す State 中の付加詞であることを [manner] として表す。また、非能格型においては、オノマトペは ACT 内の修飾要素として機能することになる。

(33) 「オノマトペ+つく」の LCS

- a. 非対格型 [Event BECOME[State[y]BE AT[z][manner]]]
- b. 非能格型 [Event[x]ACT(ON[y])[manner]]

a. は状態変化, b. は活動を表すことになる。そして、いずれも [manner] の部分にオノマトペが表す意味要素が入ると考える。

例えば、「むかむか」であれば、概略次のような構造だと考えられる。

- (34) [むかむか]_i + [Event BECOME[State[y]BE AT-[SICK][manner]]]
→ [むか(むか)]_i + [Event BECOME[State[y]BE AT-[SICK][manner]]]_i
→ [Event BECOME[State[y]BE AT-[SICK][むか(むか)]]]

オノマトペ「むかむか」が「状態変化」の「つく」と結びついて、「むかむか」が非反復形になる（このプロセスには何らかの音韻的制約が働いているものと考えられる。）。「むか(むか)」が「つく」の LCS 内の [manner] の位置に入るとは、それぞれに同一指標をつけることで示す。

次に、非能格型の例として「ぶらつく」を考える。

- (35) [ぶらぶら]_i + [Event[x]ACT[manner]]
→ [ぶら(ぶら)]_i + [Event[x]ACT[manner]]_i
→ [Event[x]ACT[ぶら(ぶら)]]

となる。

他動詞の例として「ばくつく」は、非能格型の ACT に働きかける対象を付加したものになる。

- (36) [ばくばく]_i + [Event[x]ACT ON[y][manner]]
→ [ばく(ばく)]_i + [Event[x]ACT ON[y][manner]]_i
→ [Event[x]ACT ON[y][ばく(ばく)]]

6. ま と め

以上、「オノマトペ+つく」の形式をもつ複合動詞について、その統語的、意味的特徴を概観し、LCS を用いての表記を試みた。「つく」には少なくとも 2 種類のタイプ（非対格型と非能格型）があり、それぞれ異なる意味を表すことを示した。また、オノマトペは複合語の中で付加詞として機能するが、「つく」の種類によって様態を表すものと結果状態を表すものがあることを併せて提示した。その他のオノマトペを含む複合語についても、同様のアプローチが可能かどうかは検証する必要があるが、これは今後の課題としたい。

注

注 1 代用形「そうなる」は姫野 (1999) の提案。

注 2 LCS の表記法は研究者によって差があるが、本稿では影山 (1999) で提示されている LCS を採用している。

参 考 文 献

- Burzio, Luigi (1986) *Italian Syntax*. Reidel, Dordrecht.
姫野昌子 (1999) 『複合動詞の構造と意味用法』ひつじ書房。
伊藤たかね・杉岡洋子 (2002) 『語の仕組みと語形成』研究社。
影山太郎 (1993) 『文法と語形成』ひつじ書房。
影山太郎 (1999) 『形態論と意味』くろしお出版。
影山太郎・柴谷方良 (1989) 「モジュール文法の語形成論：名詞句からの複合語形成」久野・柴谷 (編) 『日本語学の新展開』139-166. くろしお出版。
Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav (1995) *Unaccusativity*. MIT Press, Cambridge, MA.
Perlmutter, David (1978) "Impersonal Passive and the Unaccusative Hypothesis," *BLS* 4, 157-189.
Postal, Paul M. (1969) "Anaphoric Islands," *CLS* 5, 205-239.
田守育啓・ローレンススコウラップ (1999) 『オノマトペ』くろしお出版。

On Japanese Compound Verbs with the Form of “Onomatopoeia + tsuku”

Takashi Sugiura

Abstract: Japanese language is rich in so-called onomatopoeic or sound-symbolic expressions. Above all, compound words with onomatopoeic expressions are widely used. In this paper, we will investigate Japanese compound verbs with the form of “Onomatopoeia + tsuku” from the syntactic and semantic points of view. We will show that it will be necessary to assume two types of ‘tsuku’ (unaccusative type and unergative type), and that onomatopoeic expressions can be expressed in LCS as adverbials.

Keywords: onomatopoeia, Japanese compound verbs, LCS, Word Formation